

Title	<翻訳>ジャック・ロンドン「北国の奇跡」
Author(s)	小泉, 嘉輝
Citation	文芸表象論集 = Literary Arts and Representation (2017), 5: [17]-[39]
Issue Date	2017-12-31
URL	https://doi.org/10.14989/LAR_5_(17)
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

北国の奇跡

ジャック・ロンドン

これは実話であり、どんな人間の心にも失われることのない善なる核があることを教えてくれる。バートラム・コーネルという男は、出来損ないの悪党だった。海のかなたイングランドに小さな家があり、住人たちはコーネルの地上と天上の幸せを願った。しかし見返りはなく、悲嘆と涙があるばかりだった。コーネルは本当にどうしようもない、これに疑いの余地はなかった。軽薄、軽率、それに冷淡という言葉は、彼の欠点を言い表すにはやさしすぎた。

まだ少年だったころから、コーネルは悪事ばかりに興味を示した。やさしい言葉や説得は彼にまるで効果がなく、母と姉たちの濡れる目にも、父がしてくれた厳しくも親身な助言にも、心を動かされなかった。もっと早くに良心をさいなむべきだった大切なものは、まだ心の奥に隠されたままで、コーネルは親類縁者が今後耐え

ねばならない汚名を残し、イングランドの生家を飛び出した。まだ年端もいかないうちもだったが、こうなる以外に彼の運命を考へることは難しい。コーネルを知る者は、時とともに記憶が薄れるまで、苦しみと悲しみを混じえて彼の話をした。彼がはたらいた悪事の数々は、小声で話されることがなかった。コーネルの行く末については誰の耳にも入らなかつた。実を言えば、コーネルは最後の最後になつて罪を償ひ、人生の汚れた紙面をきれいに拭つていた。だがそれは遠い国での出来事だつた。そこでは、情報はのろのろと旅をしたあげく迷子になつたり、仲間の死に際を見た男たちがそれを語る以前に死んでしまふことが珍しくない。とはいへ、これがこの地の常だつた。体は頑丈でも気がそぞろだつたコーネルは、世間が差し伸べてくれた大きくざらついた手を笑い、世間の求めることはせずやりたい放題だつた。ぞんざいな言葉にはさらにぞんざいに応じ、力にはよりいっそうの力をこめてやり返した。船乗りとしていくつもの海を渡り、羊飼ひとしてオーストラリアの放牧地で働き、カウボーイとしてダクタの牛飼ひの一員となり、兵卒として北西部の騎馬

警察のもと仕事をした。クロンダイクで金鉱が発見されると兵卒をやめ、アラスカの海岸をめざして旅立った。ここでフロンティアの経験が役立ち、コーネルは早々と三人組の男たちに身を寄せたのだった。

この一行はクロンダイクへ向かっていたが、踏み固められた道は使わず、ふつうなら通らない新たなルートで行く計画をしていた。多くの馬（オレゴン州東部の山で育ったカイユースだが）に荷物をのせ、四人の男はセント・エリアス山をまたがる荒れ地へと東に進んだ。それからホワイト川とタナナ川の源流が流れる高地を経由し北に向かった。そこは地図にもぼんやりとしか記されない未知の領域で、いまだ白人の足が触れたことのない場所だった。あまりに広大で荒れ果て、動物の存在すらまばらで、少数部族のインディアンもめつたにいなかった。ときに数日は、馬にまたがる白人たちがわびしい湖のほとりや沈黙する森を通って行ったが、生きていくものを見ることはなく、ただ風のため息と水のすすり泣きを聞くだけだった。厳かな雰囲気には大地が覆われ、静寂があまりに深いために、旅する者は声を殺すよ

うになり、退屈な会話で言葉を浪費することはほとんどなくなつた。

旅が進むにつれ隠された金への期待はふくらみ、コーネルたちは急流の冷たい水たまりを手探りし、巨大な氷河の陰で泥をふるい分けていた。一度、山のような天然銅のかたまりを見つけたが、ただ肩をすくめるだけで気にも留めなかつた。馬の食糧は乏しく、見つけても毒があることがほとんどで、忍耐強い動物たちは飼い主に連れられた見知らぬ小道で次々と死んでいった。高地の分水嶺を越えると、高所特有の雹ひょうの嵐に圧倒された。やつこのことで彼らが寒さをしのげる低地の谷にたどり着いたときには、最後の一頭の馬が置き去りにされた。

しかし、雨風から守られたこの谷で事は起きた。ジョン・ソーントンが払いのけた苔の根元から、光り輝く黄金が舞い落ちたのだ。ソーントンはバートラム・コーネルと一緒にいた。その夜二人は、千ドル相当になる金塊キヤレンを野营地へ持ち帰つた。ここで一時滞在の命が下された。月の終わりになると、四人はどうてい運びきれぬほどの財宝を堀り出していた。だが食糧は着実に減りつつあり、ついには誰もがか

がんで荷を背負いきれなくなった。

土地のわびしさと秋の訪れを感じ、先に進もうという話になった。北東方向のどこかにクロンダイクがあり、ユーコン川が流れる土地があることはわかっていた。そこまで百マイルはないと思っていたが、はつきりとした距離はわからなかった。そこで金を一人あたり約五ポンド、つまり千ドルを持って、莫大な財宝の残りは一歩一度ここに来たときに備え安全に隠すことにした。食糧の準備ができ次第すぐに戻るつもりだったのだ。弾薬を使い切ってしまったので、ライフルも金と一緒に置いていった。野営道具一式とわずかに残った食糧だけを運んだ。

採掘場はもうすぐだという確信があり、一行は惜しみなく食事をしていく。すると十日目には、残すところ数ポンドとなった。彼らの前には依然、地表波打つ巨大で険しい山々が、見渡す限りにそびえ立っていた。男たちが疑念と恐怖を抱いたのはこのときだった。そこでビル・ハインズが食事制限を始めた。

昼食がなくなり、朝と晩は一日の食糧をわずかな四等分にした。等分とはいえ微々

たるもので——心身をつなぎとめることはできても、あくせく働く健康な男たちに十分に力を与える量ではなかった。コーネルたちの顔は青ざめやつれていき、日に移動距離は少なくなつた。空腹による吐き気に襲われることもしばしば、膝は弱りふるえ、何度もよろめき転んだ。息も絶えだえ体を引きずり、山頂のでこぼことした道に出る。そうして血まなこで景色を見ると必ず、新たな山が彼らを出迎えた。不気味な平穩が常にどっしりと大地を覆い、果てない孤独と静寂以外、そこには何もなかった。

ひとつまたひとつと、毛布や余分な衣服を捨てていった。途中で斧を、必要のない調理器具を、さらには砂金が入った袋までも手放した。最後にはわずかに残った食糧以外すべての荷物を下ろし、半裸状態ではいざり進んだ。デンマーク人のジャン・ヤンセンが、同じ重さになるよう荷物を四つに分けた。それぞれが、文字や言葉で表されない聖なる友情の絆で結ばれながら、尊いそれを背にのせた。野營地の火のそばを例外として、小さな食糧袋は決して開かれることはなかった。全員の日

があるそこで、食糧の分配だけを行った。

ベーコン三ポンドのかたまりひとつを、数カップぶんの小麦粉と一緒に運んでいたのは、ジョン・ソーントンだった。このひとつを一行は、飢えが限界になる最後のいつときのために取っておき、手をつけまいとしていた。しかしバートラム・コーネルはこのかたまりに目をつけ、のどから手が出る思いを抱えていた。そしてある夜、疲れた仲間が眠り込んでいるのを見計らい、バートラムはジョン・ソーントンの袋を開けてベーコンをくすねた。それから夜明けにかけ、ベーコンを少しずつ、久々のごちそうで胃がもたれないよう気を配りつつ、むさぼり、噛み、飲み込み、すべてを平らげていった。

あくる日、昨夜から湧き上がる新たな活力を隠そうと、コーネルは注意を怠らなかつた。むしろ、他の男たちより元気なく見えるほどだった。とても苦しい一日だった。ジョン・ソーントンは遅れがちで休むことが多かった。それでも夕暮れ時にはまたひとつ山を越え、小川が東へ流れる谷の入り口を望むことができた。東だ！

そこにクロンダイクと安全がある！　もう数日だけ、なんとか生き延びることさえできれば、仲間の白人の輪や食糧庫の中に帰ることができる。

あろうことか、ビル・ハインズが火のそばで体を丸め、ソーントンの小麦粉を取り出そうと袋を開けてしまった。飢えた男たちが物ほしげに見守っていた。ひと目見るなり、誰もがベーコンが消えていることを認めた。ソーントンの目が恐怖でうつろになる。ハインズは袋を落とし、声をあげてむせび泣く。ところがジャン・ヤンセンは、狩猟用ナイフを取り出して口を開いた。しわがれた低い声は、ほとんどささやいているかのようにだったが、唇から一語一語がゆつくりと、そしてはつきりこぼれ落ちた。

「同志たちよ、これは殺人である。この男は我々とともに眠り、我々と公明正大に物を分け合った。重さを量りすべての食糧を分けたということは、各人が同志の命を背にのせていたということだ。この男も同じく、我々の命を背負っていた。それは信頼、偉大なる信頼、神聖なる信頼によるものだ。この男はその信頼に背いたの

だ。今日の遅れは、疲労によるものだと思っていた。我々は誤っていたのだ。見よ！この男は、我々の、我々の命そのものがかった食糧に手をつけたのだ。これを殺人と言わずなんと見えよう。殺人に処せられる罰はただひとつ。私は間違っているか、同志たちよ？」

「そのとおりだ！」ビル・ハインズが叫ぶ。だがバートラム・コーネルは黙ったままだった。想定外のできごとだったのだ。

ジャン・ヤンセンは処罰のために長い刃を持ちあげた。しかしコーネルがヤンセンの手首を握った。「話をさせてくれ」彼は頼んだ。

ソーントンがよるめきながらゆっくりと立ちあがって言った。「俺が死ぬなんて不当だ。ベーコンを食べてもいないし、なくしてもない。何も知らないんだ。だがこれだけは最高位の神にだって断固誓えるぞ。ベーコンには触れたこともなければ、口にしたこともない！」

「ベーコンをくすねるようなやつには、そんな嘘をつくのもたやすいだろうよ」ヤ

ンセンはせわしなく指でナイフをもて遊びながら責め立てた。

「放っておいてやれ」コーネルが脅すように言った。「ソーントンが食べたかなんて誰にもわからないじゃないか。わかりっこないさ。言っておくが、俺はつつ立って人殺しを見るなんてごめんだぞ。ソーントンが何もしてない可能性だってあるんだ。その可能性をないがしろにしちゃいけない。やったかもしれないってだけで罰するなんてできないだろ」

怒ったデンマーク人は刃をさやに収めた。許したわけではなく、一時間後、ひよんなことでソーントンに話しかけられると、ヤンセンは背を向けた。ビル・ハイインズも哀れな男とは口をきかない。心のなかで（久しぶりに）脈を打った善性により、すでに恥を覚えていたコーネルだったが、どうすることもできずにいた。

翌朝、ビル・ハイインズが残りの食糧を集めてもう一度四つに分けた。ソーントンの取り分からビルは消えたベーコンと同量を差し引き、それをほかの三つの山で分け合った。この作業中、ビルは一言も話さなかった。行動だけでその意味は十分に

伝わった。

「取り分を持たせてやれ」ヤンセンがうなった。「一気に全部食べるのもあいつの勝手だ」

それからジョン・ソーントンが味わった苦しみは、ジョン・ソーントンのみぞ知る。同志たちに嫌悪の面持ちで無視されただけでなく、最も不名誉で格好の悪い罪——裏切りを言い渡されたのだ。さらに食べる量がひとり少ないため、仲間についていくか、さもなければ死ぬかの選択を余儀なくされた。このときですらソーントンは、すでに最後のひとつまみを食べ終えていた。仲間には、まだ二日ぶんの食糧があった。彼はモカシンの表面の革を切り取り、それを煮て食べるしかなかった。そして一日中、柳の枝の樹皮を口に入れ、腫れた口の痛みで半狂乱になるまでかみ続けた。その後ソーントンは、しばしば譫妄状態せんにおちいりつつも、体を引きずりよろめき転びながら、はいずり進んでいた。

しかしソーントン以外の三人にもとうとう、モカシンと若木の緑の枝に手を出す

日がやってきた。ここまで一行は、急流に沿って歩き小川にたどり着いていた。見込みはないが流木を集め、頼りない筏をつくろうということになった。実はこのとき、彼らは予期せずして、小屋が建ち並ぶインディアンの村にやってきていた。だが白人を目にしたことのないこのインディアンは、彼らを矢の雨で出迎えた。「見ろ！ あの川！ カヌーがある！」ヤンセンが叫んだ。「あそこに行けば助かるぞ！ 何としてでもたどり着くんぞ！」

一行は岸に向かい千鳥足で走った。インディアンたちが叫びながら追いかけてくる。だしぬけに、片側の木陰から動物の皮を着たひとりの戦士が現れた。戦士は瞬時に、先が象牙でできた巨大な槍を構え、狙いを確実に定めて投げ放った。びゅんと音を立てて槍は空を切り、ジョン・ソーントンの腰にまともに突き刺さった。ソーントンは一瞬よろめいてから、ぐらりと頭から前に倒れた。真うしろを走っていたハインズとヤンセンは、左右に逸れて彼を抜き去った。

奇跡が起ころうとしていた。バートラム・コーネルの胸のうちで、善の精神が力

強くはためいた。思考ではなく生来の刺激に従い、すぐさまバートラムは飛び出し、追ってきた男たちを両腕で押さえた。

「戻ってきてくれ！」彼は声を枯らし叫んだ。「ゾーントンをかヌーに！流れに乗るまで、俺がこいつらをくい止める！」

「放っておけ！」デンマーク人がナイフを探りながら叫んだ。「命がかかっているっていうのに、犬にかまってる場合か！」

「俺がベーコンを盗んだんだ。食ったんだ。だから戻ってきてくれないか？」コーネルは仲間の目に疑いを見てとった。「裁判の席で慈悲を求めるようだが、俺がベーコンをくすねた。」矢のかたまりが雨のごとく降ってきた。「急げ！俺がこいつらをくい止めるから！」

ただちにけが人は抱えあげられ、彼らはよたよたとカヌーに向かった。バートラム・コーネルは振り返り、その場で立ちつくした。これに驚いたインディアンたちは躊躇した。時間を稼げていると知ったコーネルは微動だにしない。矢の雨が放た

れた。骨矢尻のミサイルが雷のごとくコーネルに飛んでいった。

六本が胸と脚に突き刺さり、一本が首を貫いた。だがコーネルは真つすぐ立ちつくしたまま、彫像のように動かなかつた。ソーントンに槍を投げた戦士が片側からコーネルに近づき、がちりと腕を組みあわせた。残りの部族たちが戦に血をたぎらせ、戦士の元に追いついた。

コーネルは切り刻まれ叩き斬られながら、カヌーで叫ぶジャン・ヤンセンの声を聞いた。仲間の無事がわかつた。彼は善なる一戦を戦い抜いた。生涯で最初の、そして最後となつた、大義ある戦いだった。すべてが静まり返ると、この世のものと見えぬ畏怖を感じ、インディアンたちは後ずさつた。首長と六人の男たちがそこにいた。

名誉とは無縁だったコーネルの人生は、こうして幕を閉じた。勇敢に悔い改め、悪事を償つたようだった。死後のコーネルは名誉を失うことはなかつた。気高く戦つた勇姿が首長を大いに感心させ、部族は彼を敬い、戦士としての埋葬をほどこし

た。そして季節が移ろうにつれ、白人を見たことがなかった純朴な人びとには、この男の話が語り継がれることになった。「空から舞い降りて死んだ、不思議な神」の物語として。

訳者あとがき

小泉 嘉輝

「ジャック・ロンドン」は小説の面白さの原点だ」

柴田元幸編訳『火を熾す』の帯にこんな文句がある。現代の読者にロンドンの魅力を広く知らしめたこの本であるが、はたして「小説の面白さ」とは何だろうか。

この問いについて、改めて考えることから始めてみたい。

『火を熾す』に収められた作品——これは「ロンドン文学」とほぼイコールとなる——はバラエティに富む。サイエンス・フィクション、スポーツ小説、そしてロンドンおなじみの「クロンダイクもの」、さらにはハワイを舞台としたものまで、モチーフや設定はさまざまだ。一方で、それらを描く筆の運びはおおむね一貫している。物語は平坦でなく何かが起こり、緊張をはらみつつ進行する。読ませどころではスピード感がみなぎり、読者をその世界に引き込んでゆく。つまりロンドンの短篇は、

難しいこと抜きに、純粹な「エンターテイメント」として楽しめる。限られた読者に向けた教養としての小説ではなく、誰もが読むことができるエンタメとしての小説。これが「小説の面白さの原点」という言葉が指すところだろう。

ここで僕は、冒頭の言葉をお借りして、こう言ってみよう。

「『ジャック・ロンドン』は小説の面白さの原点』であるが、そのまた原点は、彼の児童文学にある」と。

職業作家としておよそ前半期にあたる一八九九年から一九〇六年にかけて、ロンドンは子どもをターゲットに多くの作品を書いた。掲載にいたったのは長篇一作と短篇二〇作。そのほとんどが『ユース・コンパニオン』(Youth's Companion) という、文字どおり子ども向けの雑誌に発表された。

この雑誌には理想とする作品像があった。コンパニオン誌編集者は、掲載不可とした原稿を返却する際にリーフレットを同封したが、これには以下のようなことが書かれていた。物語のプロットは「よく練られたもので、少なくともひとつは大き

な事件がなければならず」、その事件には「動き」と「ドラマティックな効果」が必要である。そして「悲哀を含んだ物語」は「明るいエンディング」へと終結しなければならぬ。スーザン・ウオードの言葉を借りるならば、「世紀転換期の児童文学は、面白く、すばやく進行し、またハッピーエンドで閉じなければならぬ」のだった。差し出されたこの型でロンドンには物語を造形し、それらは次々と活字となる機会を得たのである。

ただし、型の中でおロンドンは自らのオリジナリティを發揮した。例えば「生と死」は、ロンドン文学において重要な主題であるが、彼はこれを児童文学の執筆時から書き続けた。この主題を含んだロンドンの冒険譚は、当時の児童文学の中で異彩を放った。生死を分かち出来事がドラマティックに展開され、最後はハッピーエンドで終わる。児童文学の枠内で自身の持ち味を獲得したロンドンの物語は、子どもたちを大いに魅了したのである。

ところがこのエンディングの制約は、ロンドンには不本意なものだったらしい。

彼は自らの児童文学を擲楡し、「こゝういった作品は後に残らないが、少なくとも手近な金にはなる」と手紙に書いている。筆一本で生活をするため仕方なく書いてはいたが、実際はつねに自身の文学を求めていた。実はあの「火を熾す」も、そもそもは児童文学の型どおりに書き上げ、一九〇二年にコンパニオン誌に発表している。よく知られている「火を熾す」は、同じモチーフを使って一から書き上げ、一九〇八年に『センチユリー』誌にて発表したものである。この試みはロンドンの児童文学からの脱却、「後に残る」文学の希求を象徴している。とはいえ『火を熾す』に収められた代表作が示すように、エンディングの自由を獲得してもなお、生死をめぐるテーマや動的なプロットはその後も彼の作品を彩り続けた。

今回訳出した二つの作品は、ジャック・ロンドンの「児童文学」にあたる。

「クロンダイクのクリスマス」は一八九八年に書かれ、翌年三月に少年誌『ユース・アンド・エイジ』に受理された。ところが編集者から、その年の十二月までは

掲載することができないと伝えられる。しかし翌年になっても誌面に載ることはなく、原稿料も入らないままだった。結局は一九〇〇年九月に原稿の返却を求め、ロンドンはその後のこの作品の発表を断念した。極北の男たちの親交を描いた心温まるクリスマスストーリーは、ロンドン作品には珍しくなごやかなムードが漂う。それだけ子どもを強く意識して書いたのだろう。

「北国の奇跡」は一九〇〇年十月、例のコンパニオン誌に受理された。原稿料として五〇ドルがロンドンに支払われるも、作品はすぐに掲載にいたらず、彼の没後一〇年が経った一九二六年十一月に、ようやく同誌に発表されることになった。この作品に関してロndonは特に子どもを意識しなかったと言ったようだが、真っ先にコンパニオン誌に投稿している。また勸善懲悪のストーリーは教訓的でわかりやすく、同誌が受理し最終的に掲載したことにもうなずける。善悪のはざまで揺れるコーネルの心理は緊張感を持って描かれ、善が炸裂したコーネルの勇姿は、ロンドンらしい鮮烈かつスピード感のあるタッチで語られている。

どちらの原稿も受理されたものの、生前に活字になることはなかった。その理由は、先のコンパニオン誌の型を参考にすればおよその察しがつく。「クロンダイクのクリスマス」は、「動き」や「ドラマティックな効果」がある「大きな事件」と呼べるものがなく、ご都合主義的な展開で、内容的にはいささかセンシメンタルすぎる感がある。「北国の奇跡」は、幕引き部でコーネルが英雄的に描かれはするが、直前の惨殺される様子はむごく、決してハッピーエンドだとは言えない。どちらも児童文学の理想の範疇に収まらなかった、ということだろう。当然、書籍としても陽の目を浴びることはなかった。

こういう経緯があつてだろう、「クロンダイクのクリスマス」も「北国の奇跡」も日本語で読む機会を与えられてこなかった。しかし、ロンドンが一般読者や研究者を問わず広く読者を魅了している今、両作を紹介する試みは決して無駄なことではないはずだ。一方はロンドンらしさが發揮できなかった異色の作品として、他方は児童文学の枠を越えた「小説の面白さの原点」の原点として（あるいは『野性の

呼び声』のジョン・ソーントンのスピノフとして)、また毛色のまったく異なる二作を数ある彼の児童文学を参照する際の両極として、どんな形であれ楽しんでいただければ幸いである。

最後になりましたが、投稿から掲載までお世話になった水野尚之先生、編集長を務めてくださった高橋一馬さん、よき同志である文芸表象論分野の院生の皆さん、本当にありがとうございます。翻訳の機会をいただいたことに心からの感謝と善を込めて。

底本

Jack London "A Klondike Christmas" and "A Northland Miracle" in *The Complete Short Stories of Jack London* Volume 1. Earle Labor, Robert C. Leitz, III, and I. Milo Shepard. Stanford University Press, 1993.

参考文献

Susan Ward, "Jack London as a Children's
Writer" in *Children's Literature*, Volume 5. Johns
Hopkins University Press, 1976, pp.92-103.